

日本語のアスペクトについては、共通語を中心として、これまでも多くの研究がなされてきた。日本語諸方言についても同様である。しかしながら、日本語方言のアスペクトに関しては、特定の方言についての考察が主であって、全国諸方言アスペクトを踏まえたものとはなっていない。このような研究状況にあって、『方言資料叢刊』の創刊時から、「日本語諸方言アスペクト」について、全国規模で展望し得る統一的で確實豊富な資料を整えたい、との思いを強く抱いていた。

1993年の方言研究ゼミナール(1993.4.24~4.27 大阪)で、この提案が了承され、さっそく佐藤虎男氏を中心として、大阪在の岸江信介氏、井上博文氏、鍋木昌博氏に調査要綱及び調査項目の作成を依頼した。煩雑な作業の依頼にもかかわらず、用意周到な調査表が7月には整えられた。研究ゼミナールの幹事がこれを検討し、部分的な修正をして調査担当者に発送し、調査を依頼した。(1993.7.24)

日本語方言アスペクトの調査の立案の基本方針は、次の6点にまとめられている。要約して示す。

- (1) 場面設定による質問項目を核とする。自然語観察をも尊重する。
- (2) 調査地に生育した60歳代の女性について調査する。
- (3) 動詞(補助動詞・助動詞)ばかりでなく、共起する副詞その他の修飾成分を一体のものとして採録するとともに、その修飾成分が必須成分か否かには特に注意を払う。
- (4) 調査は、提示する場面とその狙いが相手方に充分通じることを大前提とする。
- (5) 調査現場では、回答の出方、順序をも尊重する。
- (6) 参考事象(予想語形)は、調査者で適当に取捨する。また、複数回答の場合、それらの違いについての説明を可能なかぎり求める。

日本語諸方言のアスペクトについての方言地理学的な側面と記述的な側面とを併せ持った調査要綱となっていよう。その結果、佐藤が「本資料の性格について」で述べているような「東日本の分布模様が比較的単純であるのに対して、西日本はそれが比較的複雑である」といった指摘が、各地方言の実態を踏まえた重みを持ったものとして受け取られるのである。

ここに収載された45編の報告には、1993年から1994年の日本全土にわたる(中国、インドネシアを含み)方言アスペクトの状況を、定められた場面設定、質問文言によって調べた結果が網羅されている。「日本人のアスペクト表現の発想法の諸相」「日本語アスペクトの素顔、素肌」が出ている。本資料集を基にして、日本語アスペクトの根源への追究が可能となった。